３　　訪問の合図　　　　　　　　　　　　　　　　用言③　形容詞・形容動詞

薩摩守忠度は、年ごろＡある宮腹の女房のもとへア通はれけるが、あるとき、おはしたりけるに、その女房のもとへやんごとなき女房客人に来つてＢやや久しう物語し給ふ。小夜もはるかに更けゆくまでに、客人帰り給はず。忠度軒端にしばしやすらひて、扇を荒く使はれければ、宮腹の女房、「野もせにすだく虫の音よ」とイ優にやさしう口ずさみウ給へば、薩摩守やがて扇を使ひやみて帰られけり。そののち、またエおはしたりけるに、宮腹の女房、「さても一日、なにとて扇をば使ひやみしぞや」と問はれければ、「Ｃいさ、かしかましなんど聞こえ候ひしかば、さてこそ使ひやみ候ひしか」とぞのたまひける。

【本文チェック】

①　ア～エの用言の、活用の種類（動詞は活用の行も）・文中での活用形を（　）に書きなさい。

　ア（　　　　　　活用　　　形）　イ（　　　　　　活用　　　形）

ウ（　　　　　　活用　　　形）　エ（　　　　　　活用　　　形）

②　Ａ～Ｃの語の品詞を〔　〕に書きなさい。

Ａ〔　　　　詞〕　Ｂ〔　　　　詞〕　Ｃ〔　　　　詞〕

③傍線部について、例にならって係り結びを指摘しなさい。

(例)　人やありける。

【語彙力 ✚】

問１　次の語句の意味について、空欄を埋めよ。＊〔数字〕はノート本冊での本文の行数を表す。

１　物語〔２〕　　 　①（　　　　　　　）

　　　　　　　　　 　②物語

２　やすらふ〔３〕 　①たたずむ

　 　　　　　　　　　②（　　　　　　　）

問２　次の傍線部の意味として最も適当なものを選べ。

１　はやはや源氏の宮の御参りにとて、やんごとなき人々多く参り集まりたまふなり。（狭衣物語）

ア　珍しい　　イ　美しい

ウ　高貴な　　エ　由緒のある

（　　　）

２　その、太政大臣いとひさしく絶えたまへり。（大鏡）

ア　長く　　イ　厳格に

ウ　急に　　エ　残念にも

（　　　）

【文法力 ✚】

問３　次の傍線部の用言の活用の種類と、文中での活用形を答えよ。

１　恋しかるべきの月かな（後拾遺集）

活用の種類（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

２　二つの矢を持つことなかれ。（徒然草）

活用の種類（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

３　天下また静かならず。　　（太平記）

活用の種類（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

問４　次の（　）内の語を、適当な活用形にして答えよ。

１　いと（苦し）ば、山寺なる石井によりて手にむすびつつ飲みて、　（更級日記）

（　　　　　　　）

２　水をみ入るること、（めでたし）けり。（徒然草）

（　　　　　　　）

３　北には（たり）して、松吹く風たり。（平家物語）

（　　　　　　　）

問５　次の傍線部のうち、形容詞の一部であるものを一つ選べ。

ア　海あらければ舟出ださず。（土佐日記）

イ　大きなる堀にてありければ、（徒然草）

ウ　秋にはをさをさ劣るまじけれ。（徒然草）

エ　忘れ貝寄せきて置けれ沖つ白波（万葉集）

（　　　）

【探究】表現してみよう

問６　今日はお互いに忙しい中での、恋人との久しぶりのデート。ところが待ち合わせの場所で相手の友人とも遭遇。恋人は友人と長話を始めてしまった。自分ならどう思うか、次のどちらかの立場になって、心の中のつぶやきを表現しよう。

ア　待っている側

イ　友人と話をしている側

〔

〕

【解答】

【本文チェック】

①　ア＝ハ行四段・未然　イ＝ナリ・連用

　　ウ＝ハ行四段・已然　エ＝サ行変格・連用

②　Ａ＝連体　Ｂ＝副　Ｃ＝感動

③　さてこそ使ひやみ候ひしか

問１　１＝話（会話・雑談）　２＝ためらう

問２　１＝ウ　２＝ア

問３　１＝シク活用・連体形　２＝ク活用・命令形

　　　３＝ナリ活用・未然形

問４　１＝苦しけれ　２＝めでたかり　３＝峨々と

問５　ア

問６　観点　アの場合は長時間恋人を待っていることなどに対して、イの場合は友人との会話を楽しんでいる時に、恋人のことを気にしているかどうかといったことなどに対して、自分の思いを表現できていること。

【現代語訳】

問２　１　早々と源氏の宮が入内なさるのに（お仕えしよう）と、高貴なお方が大勢（お屋敷に）参集なさっているとのことだ。

２　その後、太政大臣の位はたいそう長く途切れなさったままだった。

問３　１　きっと恋しいに違いない（美しい）夜の月よ。

２　二本の矢を持ってはならない。

３　天下は再び静穏ではない。

問４　１　とても苦しいので、山寺にある湧き水に立ち寄って手ですくって飲んで、

２　水を汲み入れることは、見事なものであった。

３　北には青山がけわしい様子で（そびえ）、松を吹き渡る風ももの寂しい。

問５　ア　海が荒れているので船を出さない。

イ　大きな堀であったので、

ウ　秋（の様子）には少しも劣らないだろう。

エ　忘れ貝を（浜に）寄せて来て置いておけ。沖の白波よ。